

人文学・社会科学特別委員会（第30回 R8.3.10）に おける主な意見

令和8年7月17日

文部科学省研究振興局振興企画課学術企画室

＜資料の記載内容について（取りまとめの作成に向けて）＞

- AIの利活用により現物資料が軽視され、学問が衰退するとの意見がある。しかし、AIが作業を担うことで、研究者は創造的な活動に注力することができるし、現物資料の価値も変わらない。その点についても文書に明記すべき。
- AIと研究者が高いクオリティで対話するためには、人文学・社会科学の教育がきちんとなされていることが前提として必要であることを、文書にも明記すべき。
- AIそのものについて、人文学・社会科学の面からどのように捉え、考えるか、あるいはAIと社会との関係を人文学・社会科学はどのように規定し、今後の方向性を導き出すのか。そのようなことを研究することが人文学・社会科学の根本的かつ本質的な貢献であり、文書にも明記すべき。
- AIと人間が連携して推論していくことなど、ネットワークの中でAIと研究者がどのような関わりを持って研究が行われるのかについても概念図に盛り込むべき。
- 最近では、AIが研究者に材料を提供し、研究者が解釈に専念するという関係でもなくなっているのではないかと。人間とAIが対話をし、その中で新たな解釈が生まれると言う協調関係にあるものであり、文書の記載もそのように改めるべき。
- 「効率化」という表現は、無駄を省けば良いという意味に捉えられてしまうリスクがあり、人文学・社会科学とは本質的に相容れないと誤解される恐れがあるため、ワーディング等、文書の記載は工夫されるべき。
- 学生や若手研究者に対してどのようにAIスキルを教育すべきか検討が必要であり、文書にも明記すべき。

<AI for Scienceにおける人文学・社会科学の役割>

- AIをどのように活用するのか、何のために活用するのか、さらにどのようなAIを作るべきなのか。AIに人格を与えるのならば、どのような人格が相応しいのか。人文学・社会科学の側面から考えることが重要。
哲学や文化人類学、文学等の人文学がAIと社会に本質的な貢献ができる部分はそのような点であろう。
- AIによって社会が急速かつ大きく変化する中においては、人間とは何か、人間はどう生きるべきかということを考えることに意味がある。
- AIというツールによって人間の思考がどのように変化するのか、人文学・社会科学の視点で考える必要がある。
- 社会科学においても、AIによって社会がどのように変化するのか、変化に対して人間はどう対応すべきなのかということが大きなリサーチアジェンダとなっている。

<今後、必要となる取り組み>

- 文化財などをAIで活用することは、通常では触れられない資料や遠隔地の資料どうしを比較することや、失われつつある文化を保存することにもつながるため、積極的に進めるべき。
- 各研究者がRAGの使用を始めとするAIの利活用を可能とするためには、研究者ネットワークへの支援が必要。ネットワークも、人文学・社会科学のみで構成されるのではなく、メタサイエンスの研究者も組み込まれていることが必要。
- AIの利活用によって、日本の研究者が日本のことを研究するだけでなく、日本のことを研究する海外の研究者が増えていくことにもつながっていくべき。